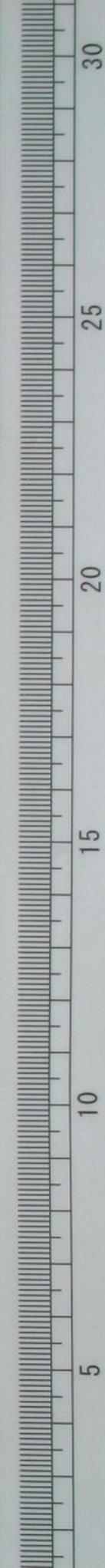


春堂獨語

卷三

20

特別  
44  
1919  
103





何れ邪意也 印つて其洋のいあるとそふ故うあると  
 のいさう、一人の衆を行はせ給ふ事ん非の自若し  
 と忠義をんたまふきと怪ふも其洋の尺とそふ所の貴  
 風とそふて七も一い候む、佛友の予事とそふおと  
 却つて泰西の文のいふ物とそふ金一とそふむと  
 とそつ、今も佛書を校むるに程也 清徳の深  
 遠とそふ後、泰西の格とそふするともあふふと  
 かんばあふ、西洋の格けるにそふ夜のこととそふ世  
 の長短のあふ、佛書を校むるに程也 清徳の深  
 遠とそふを細説とそふ、此を伊洋修二の格とそふ関す  
 の清説を讀むに程也 清徳の深遠とそふ、此を伊洋修二の格とそふ関す

東洋叢書

ふつと右の要を掲ぐ

増一阿舎七日用品に釋迦の須彌山論を載すといく  
 抑七須彌山の論を度大つて衆山のふふとあふ  
 ろふ出るといふ葉四個由旬、ろふ入る、亦八万四千由  
 旬と、而して北と四程の遠とそふ生とそふ四角を  
 四城とそふ皆金銀水鉄、瑠璃とそふ、其城とそふ  
 銀都、銀都とそふ金都、水精城とそふ瑠璃都、  
 瑠璃城とそふ水精都とそふ、又山上とそふ五程の天とそふ  
 四天王とそふ或の諸の閻又とそふひ或の諸の諸の  
 とそふひとそふ、又山下とそふ阿修倫とそふとそふ三十三天  
 とそふの、又とそふ山頂とそふ三十三天とそふ止し晝夜

照明あるを克自ら北照とす日月も北の山より  
流行す、日天子の城郭、月天子の城郭、最大の星、  
最小の星、各依掛式千と明く、よき事とせん

又諸山圍の状を説いて

須彌の山と南に大鐵圍山あり、北の山の表に、  
尼連提山あり、尼連提山の後山あり、法羅山と  
名く、北の山を去るを後北山あり、伊佐山と名づく  
北を去るを後山あり、馬頭山と名づく、更に後  
山あり、毗那耶山と名づく、毗那耶山あり、鐵圍  
大鐵圍山と名づく、(百卷)  
近む懐敗の状を説いて

釋尊

若し北の山間懐敗せん、時をいしも天降雨てか  
生苗も大なり、小河泉源皆枯渴し一切の流り皆  
を奪ふ、悔しを久しく信ずることをいふ、北の四大  
河もかたつら、を奪ふ事とをいふ、北をいふの  
も

若し北の山間、二の山あり、北のゆる山、樹木悉  
く凋落す、是時流り泉源の小水皆枯渴し、四大海  
あり、由旬の内は枯渴し、海も七音由旬より、  
水自ら竭く

若し四の山あり、出るの四大海あり、深さ千由旬あり、  
のみ音出る、時を四大海あり、七音由旬をいふ、



歎すもふをきかえしませう

釈迦と此の如く壞敷の姿を述べ終るを一轉と成  
就のおを説く

劫還て成就するとき火還て自ら滅し空の中  
大雲起ることありん漸くは雨を降す時、此三千大  
千刹土、水其中を過滿し梵天の上なるも、此の時  
地あり、漸く又停住して自ら銷滅す、復て風を  
起るをば隨風といふ、地ありを吹きこみ、又聚  
着す、是の時彼の風、千の須彌山、千の祇彌陀山、  
千の尼彌陀山、千の法蓮山、千の伊休山、千の毗那  
耶山、千の鐵圍山、千の大鐵圍山を起し、云々(中略)

釋尊傳記

また千の四海ありて又千の四天王宮、千の三十三  
天、千の散天、千の兜率、千の化自在天、千の他化  
自在天を千と云ふ、而して時、亦亦滅して地を起して  
生ず

と説くは、この即ち子にユラの如く生ずるに  
いあるが、一層細く論ずるが、俱舍論と瑜珈  
論と説いたるを引照して、子にユラ説に比較して  
アキラカ

阿毘達磨俱舍論卷第十一分別世品第三十四  
如是已説有情世間、器世間、今當説、頌曰  
安立器世間、風輪最在下、其量度無數





勝の方を墜ちぬと曰ふ理屈はとまふを  
瑜珈地論に云

此大風輪有二種相、謂仰周布及傍倒布、  
由之持水令不散墜、

とある、此の説は、仰周布は、おぼろぎの  
お心のとる、傍倒布は、丁を起し心かと解しん  
よかろう、さうするんか、そのとありて、  
ぬこころをさる

有情業力感別風起搏擊此水、上結成金、  
如熟乳停上凝成膜、

此の雨のいこころ、此のぬの液をさる二種あるを

東嶽真製

大乘の瑜珈師地論に云く、  
有大風輪云々、由彼業力金藏雲興、從此降雨、

注、風輪上、次復起風、鼓水令堅、此即名為金  
性、性、地、輪、云々、

故、供金の液もさるハカントの子ビエラ液のぬぐ子ビ  
エラ的、内輪の、外圍が、液固して、乳汁の上層に膜  
をさる、さる、ぬの、液も、さる、瑜珈の液も、さる、  
カ、アラースの子ビエラ液のぬぐ、一部の、密な、補厚  
さる、さる、の、中心、さる、さる、さる、他の、か、さる、の、吸、収、せ、  
か、さる、一、周、と、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、  
さる、さる、水と、朱砂と、混合、さる、さる、朱砂の、塵、さる、沈、停、



又瑜珈師地論の如ういふてある

次復風起鼓水令堅、即由此風力所力故、云い  
この海も如く此の引力といふより存することを  
明くしてその我々の引力はニートンの如く  
位にしてその子定計らんや数千年あつたヤシ  
ト此の如くいふてあるの如く、下界

以上器世間論の早雲院と吻合するも唯此佛教の如  
何の科學的の如くなるべきものと思ふのみならず  
其の如くべきものたるをさうしてさうして其の如く  
一例の如くも、苟くも冷眼眼以て佛書を讀む觀  
ハ其の如くも、大且の深き其の如くも、其の如くも、

来りて其の如くも、其の如くも、其の如くも、其の如くも、  
其の如くも、其の如くも、其の如くも、其の如くも、

○佛教と幻術

釋迦の法を説くは其の如くも、其の如くも、其の如くも、  
其の如くも、其の如くも、其の如くも、其の如くも、

朱子曰浮屠居深山中、有鬼神蛇獸為害、故作  
咒以禁之、朱子曰、緣他心虛故、能知其性情、  
制取得他、咒全是想法、西域人誦咒、如此  
唱、又為雄毅之狀、故能禁伏鬼神、而一朱子

又所謂の鬼神を解して、世人所謂  
鬼神、多是喫酒喫肉、漢、見他戒行清潔、方寸  
田無累底人、如何不生欽敬、とんり信をそとくま  
佛者をまきく自家防衛の为り、呪法を行ふもの  
の如し、且ツ其の所謂の呪法を戒行清潔  
とて、随伴する一の連紳威厳たる敢て不思  
儀を、然るも其の如し、  
ほ為氏の为り、回護するもの、願うる佛教を布  
教の方便として、幻術を行ひし如し、釋尊自  
身も大の幻術を講究し、且つ自ら行ひしこと  
疑いなき如し、蓋平幻術と外道の術と

東林院

佛の正法である也、唯此意味の人心を反感する  
幻術のことと大なるものあり、釋尊出山の時、  
方丈羅漢の執力侮る能はざる者あることと全く  
幻道と巧なる用心たる人心を得たりし由、之  
のみおしと起る釋教、設令い教理を、  
婆羅門の卑賤なるものあり、然るも如何に  
幻術と一の方便なる能く、婆羅門の  
扶抗し得んや、釋尊果して幻術をこまぶる刻せ  
せし、  
まろくの一考巧めたる術を得し、似るると、  
立栗園の日本佛教史、  
幻術



てして、金と瓦礫とを併し瓦礫を金と作さし  
て、是の如く法物各能く化せしむ。云々といふ  
こと、定まらば幻術として、世人の目を眩ませしむる  
こと、さかた、而して釋迦西傳の幻術も、大に波瀾  
門に勝んずると見え、尚ほ大論に記して「釋  
迦法物多能く轉変す、外道の輩、轉化せし  
久しきも、七苦の如き、法佛及び弟子の轉変  
の自在ありし久しあること、予しと申す、捨去ん  
ず、釋迦の幻術も上意てし、こと以て推知  
すべし云々」

釋尊並に弟子も幻術を用ゐることを知らざる

釋尊製

として、是の如く、世に其の功德を稱して、維  
摩手偈の如く、經書咒禁術、二伎諸伎、盡畫  
現行此事、饒益諸群生、是言饒益衆生、  
善巧方便也、故佛圖大經、鉢中生蓮、石勒起信  
菩薩提流支、柳枝涌井、三寶佛嘉歎、苟有  
助正法、咒術不可廢、焉と彼の楞伽、五年  
を断つべし、天仙其の具穢を始ひ、餓鬼其の  
唇吻を舐る、戒行精潔の者も、あつて其効を  
得ること、予し無量の人も、あつて鬼亦を材不  
伏す、能はずと云ふ、又肉を食ふべし、予し諸の咒  
術を、し成るべし、いと云ふこと、まじ也、其理化









大中正心の本教に、斯極の説くのである。

○三千世界

佛ありと隨分出轉目の數うまひ、あうし三千世界  
を形容の數もまひ、佛ありと速快苦樂と十  
界入分(地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間  
界、天上界以上六界を六凡と云)蘇摩羅界、縁交界、善  
薩界、佛陀界以上四界を四聖と云)より十界より又  
各々十界よりまひ、あうし三千世界の  
之を此の万界と十如是(如是相、如是性、如是體、  
如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、  
如是本末究竟)とまひ、あうし三千世界の  
あり。

佛經

一、三千大千世界あり、あうし又此の千界の各界三  
世間(五蘊世間、情想、衆生世間、身取、國土世間、天地)  
あり、あうし三千大千世界あり、あうし  
あり。

○日本に在る佛の特色

佛ありと心の本教あり、あうしまた佛ありと  
日蓮の化せし一極の宗ありとまひ、あうし  
此の宗の佛ありと心の本教あり、あうし  
今日本に在る、地獄、西海の宗ありとまひ、あうし  
あうし日本に在る、地獄、西海の宗ありとまひ、あうし  
と極るありとまひ、あうし日本に在る、地獄、西海の宗ありとまひ、あうし









自ら在家の服装の上へかき袋を着け以て真俗の融合をなすしはのみならず事言を以て太ももに紐の上と既くは佛衣の物をも穿るべしと云ふべし

降つて桓武天皇の延暦年中に最澄(傳教大師)が唐より傳へて比叡山の延暦寺に坐して天台を唱へ出しは天台の不信を矢張る法華經を以て世に佛法の念一を致すを以て最澄と天台の理窟を偏するを齟齬して順曉河内關架とて之を齟齬を以てけ條然福のうも福法を以てけ又道遠の意のうも世に戒を以て之を之れと

東洋叢書

加味して實際のうも一經の特色の如きを有する日本の佛教の出来にのみある又此の字の取式にうもは木乘の因戒戒を戒法に木乘を因戒戒とありはるはる何んか乘の戒法を以て戒を授けり戒壇を大なるの事大を以て外に太言するものと此の二ヶ專有するゆへに之を以て最澄と大乗の戒壇を以て顯出するに主張しはるはる大乗の因戒戒と利他的道徳を以て戒法と此の戒を以て之を以て根本とし又個々の戒一切衆生を以て佛性ありと以て之を以て自他之を以て之を以て之を以て大乗の利他的道

徳の起正と云ふの事ある。最浄戒、形式を梵網經に  
取つたけれども其の精神は全く法華名説の中道の  
の觀であるの事ある。此の戒を指す事を戒と云  
と云ふ事は、佛の望むべき戒を擇ばず、何人の戒  
の中道の戒と悟る小我の心を捨て、大我の心  
一戒と云ふ事なき、只とい外形を佛あるの姿をあるが  
も梵網の規定を念でも能く持戒の人と云ふ事  
が出来ると云ふのは、最浄の戒と云ふ事、  
一戒と云ふ事ある。

傳教大師の法華經の注に出で日本の佛道を修する  
に戒と云ふ事あるのは、戒と云ふ事あると云ふ事

法華經

をよまうし、うら、戒重きを大に是壽經を正依  
としてそのまが曰く浄土云々の内にも、戒重きの開創し  
て、真宗の教が、漸教びを我々うら、  
心年終や思ふて来れ、山のやうな事と云ふ事  
悉くを打破して涅槃の境界をある事、  
亦いめ多きを要し、あつうの修行に要する事、  
頓教と云ふ方びと宇宙の真如を又云ふらん、生  
死の流轉する此身その終涅槃の境界を得る事  
と云ふ事、これを能作の教である、また、  
佛のあり、阿彌陀如來の教、  
直に往生成佛する事、と云ふ事、



此とく要領を得たり後と云ん

佛傳の南北法傳に於佛の誕を出家年まで涅槃  
と乳を許細の其月日を記し居るも其が各  
北四書の月日と同し又其りが其月日の  
盈昃と朔望と上弦と満月と日との相違は一  
一と其の曆更なるを以て後記するを以て  
その是の事

斯く記し居る所の例を法傳を以て引換し居るも今  
と二三を抄出す

一 歷世譚序説 と降胎を中るは 迦室羅城  
聖の月(七一八月)の上弦とし誕生を其後十ヶ

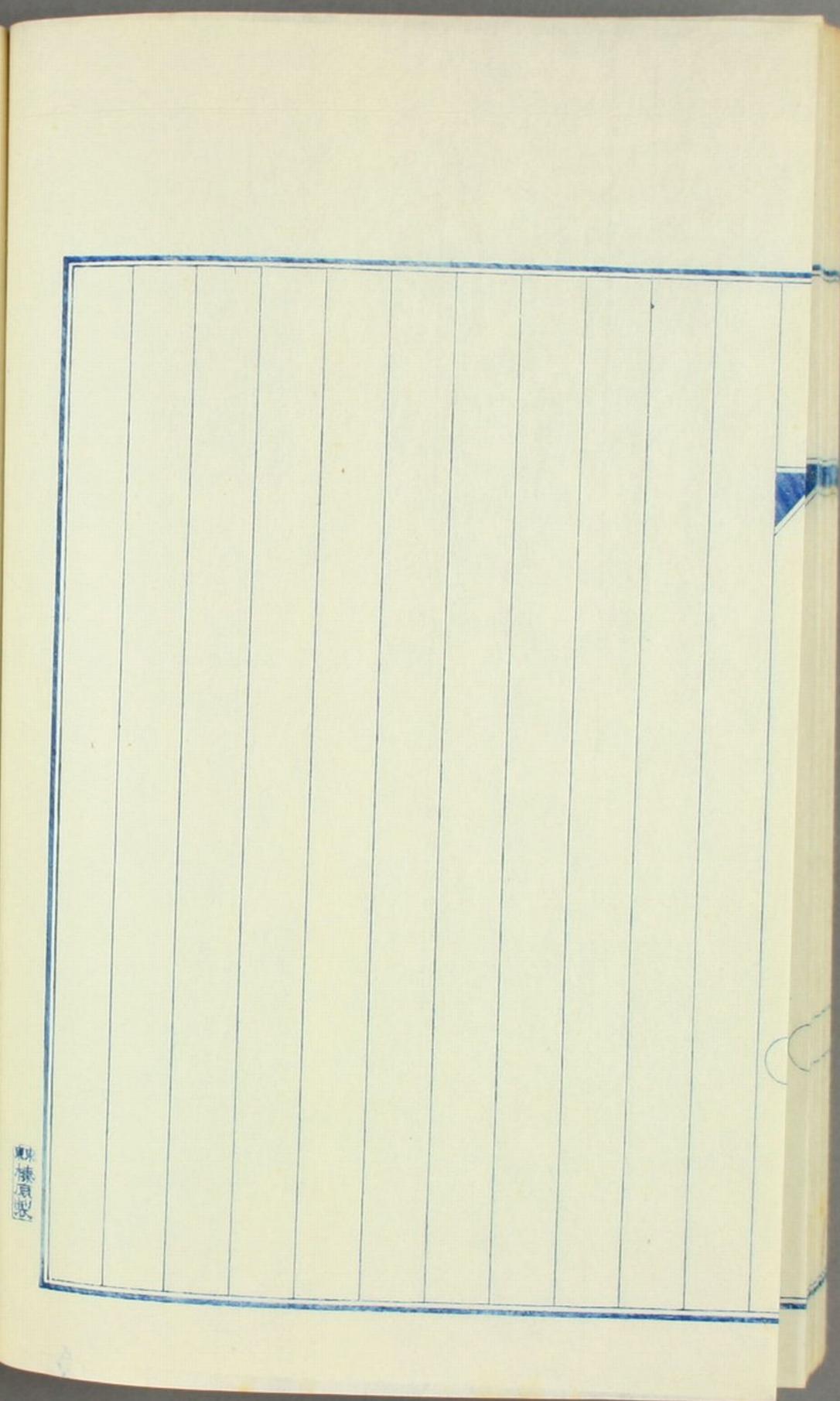
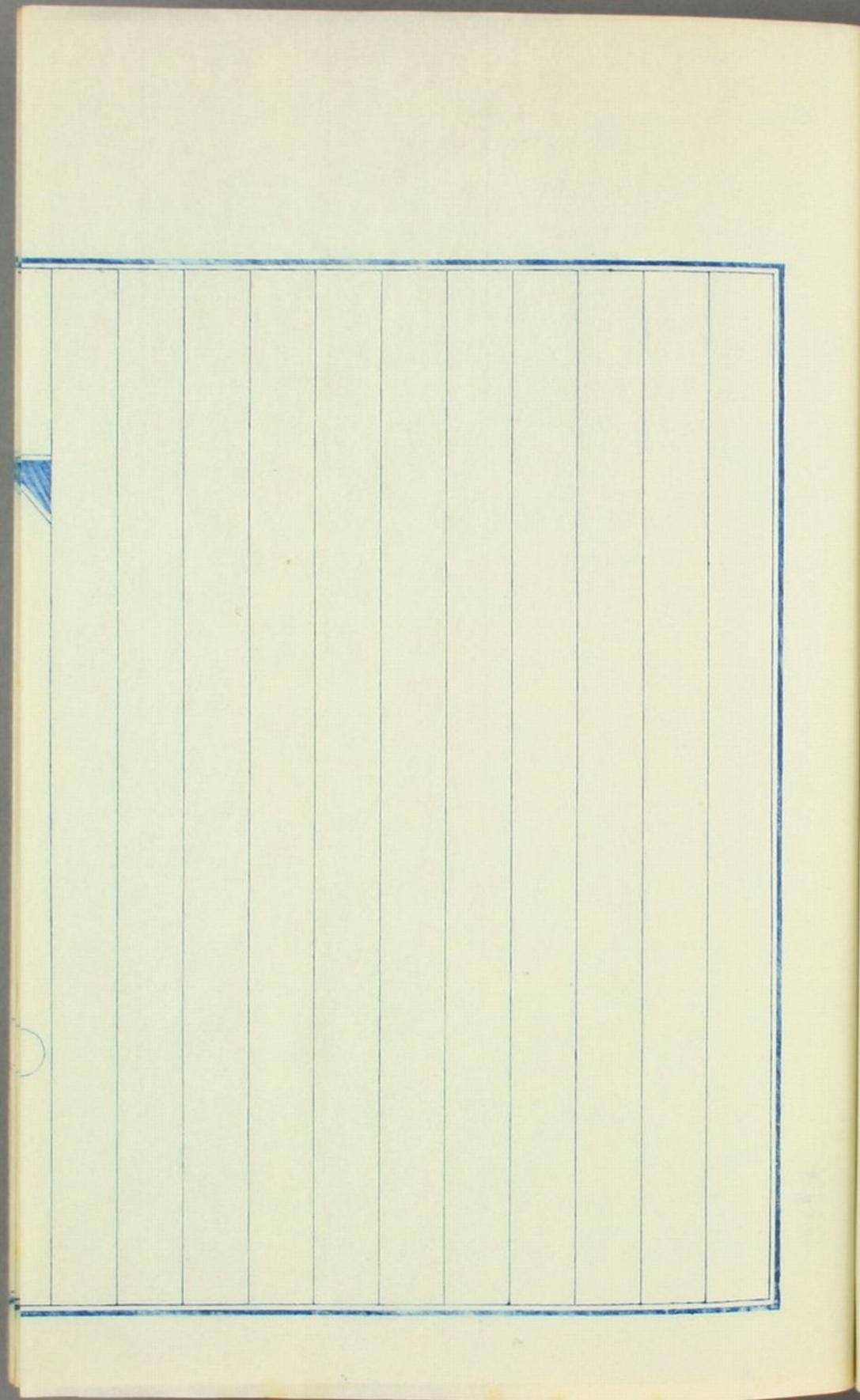
月即逝 慧陀(五一六月)の上弦とし出家と  
成道とを 頤沙某の月(六一七月)の満月とす  
と云

一 緬甸傳 と降胎を七月の上弦、誕生を其十  
月の夜出家を七月満月とすウツタラタン宿  
の日、菩提樹下生、成道及涅槃をカトリン  
月即四月の満月とす

次より乳を以て涅槃の行を考ふるも其の如し

一 佛般泥洹經 經曰佛以四月八日生、八日棄  
四、八日得道、八日滅度、以佛涅槃時、出家年  
以八日得道、以八日般泥





東洋書局





○印分の西語

印分の名称を信度河を以て其の信度の轉印を以て  
此の東支那を以て北回部を以て月の義を以て或  
ハ因陀羅の名を出して其の傳説あり、其の  
印分を月と云ふを言笑の西域記致七のを以て本  
と云ふ

詳夫天竺之稱、異議紛紛、舊云身毒、或曰賢  
豆、今從正音、直云印度、一曰印度者唐言月、  
月有多名、斯其一稱、

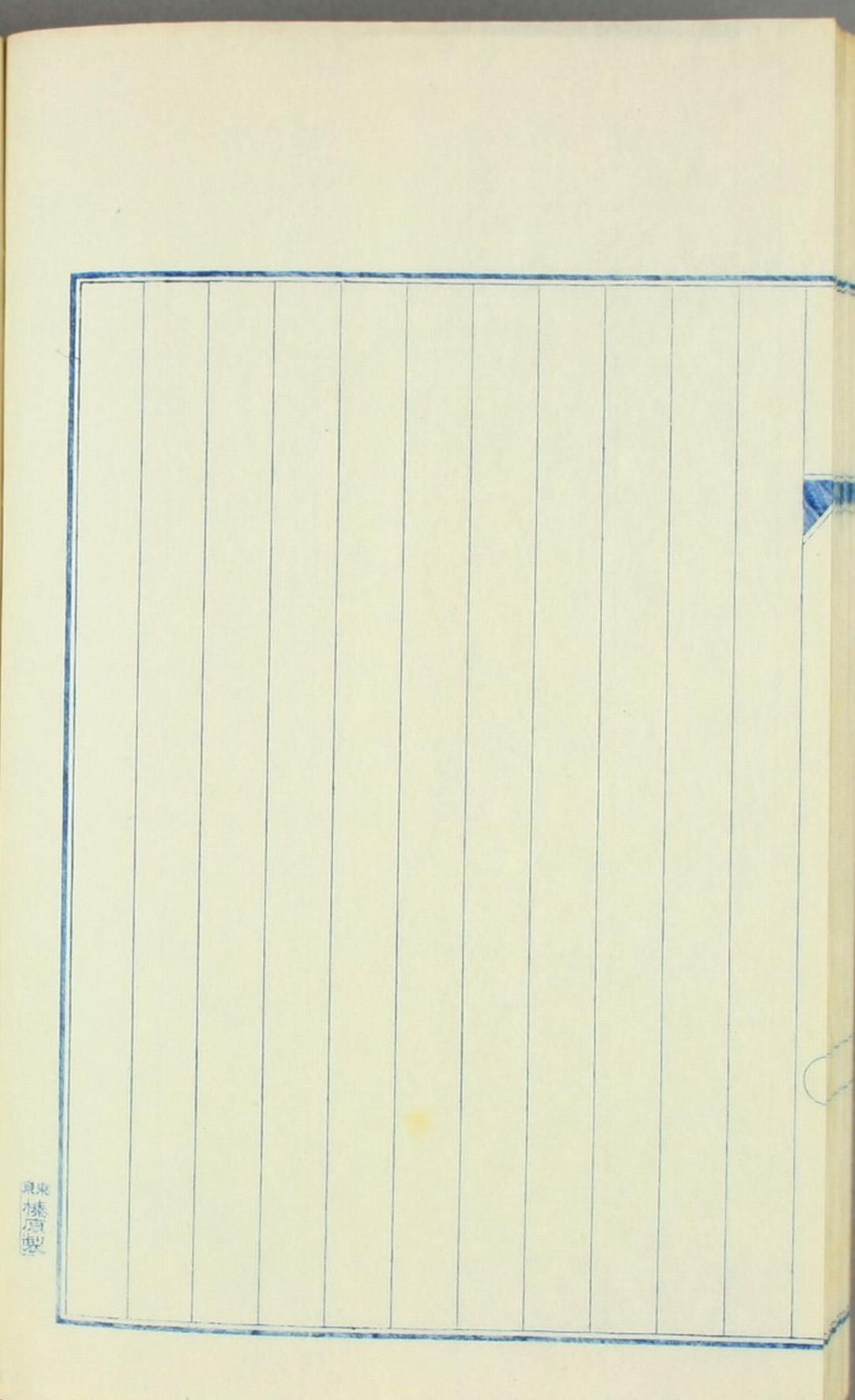
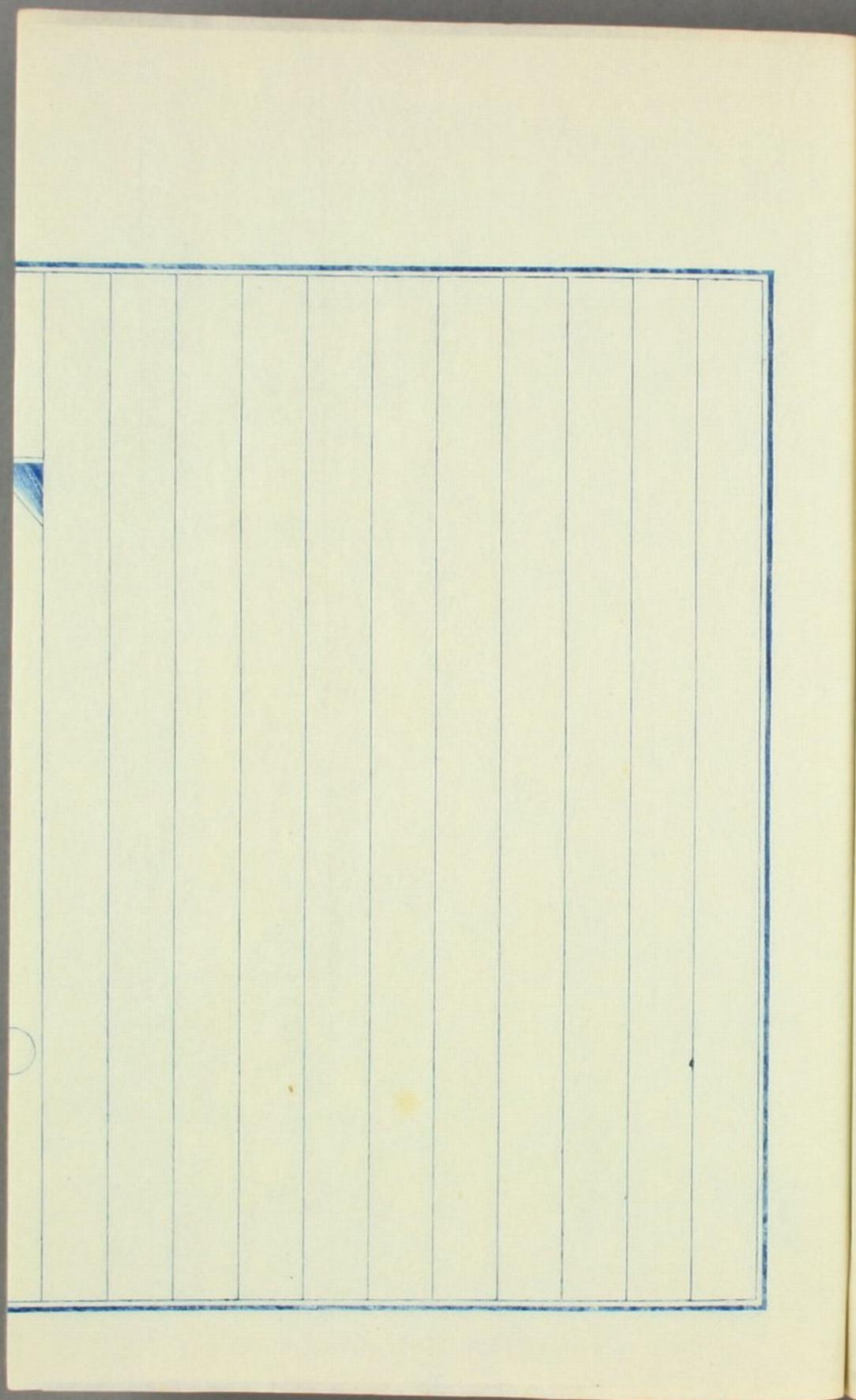
と而して北回を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ

後世の月を以て北回を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ  
Soma 是は月を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ  
之を以て其の月を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ  
然るに其の月を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ  
月と云ふは其の月を以て其の月を以てするを以て北回を以  
て相繼を以て月の照臨するを以て其の相繼を以て北  
回と云ふ









○四書藕益解

四書藕益解と云ふ書は今から二百餘年前の  
藕益大師の佛門の高僧佛敎の書と云ふ四書  
を注解しし書なり此書南條建城の書なり  
南條博士支那の取りあはせし書を建城  
副刻し附せしと云ふ此の南條何れの本を  
得一讀せんことを期す

○考するに辨後

今こそこの書の事を知るは南條の書なり  
念を生ずる徳の氏と云ふの事なり此の書は  
南條の書なり此の書は南條の書なり

○又此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり  
此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり  
此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり

桓武天皇伏見谷村邊に有之候陵只今迄の通に  
ては永々荒行雜人等入込穢敷まかり成候に付  
陵廻り一二町計も山門へ御付候は、垣にても  
圍ひ末には小庵にても建、陵守をも被附置度  
御門主思召候由御申越候何も遂相談候處簡様  
の品相濟候ては外に障儀多寺社等之儀は新規  
願候品難取上事に付御門主御領に候得共此儀  
は決而難成筋に候間可有御心得候

松平伊賀守周

老中連名

此の書を終めて之を論せしに如何なる事なり  
此の書を終めて之を論せしに如何なる事なり

又此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり  
此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり  
此の書は南條の書なり此の書は南條の書なり



〇越公と川中嶋論

このころ越公は其徳のあつた所の史論をよき友の史  
くをえんが、中嶋を川中嶋とするも生の地理  
的史論をよみ而も其をよき友の史論を  
印行せし徳公を送るんが、其の文をよ  
みよするもよき友

河中島の戦

凡そ馬の力も其力相敵するに地をよめ其地を  
授くる者も其地をよめ其地をよめ其地をよめ  
又轉瞬して其地をよめ其地をよめ其地をよめ  
おるも其地をよめ其地をよめ其地をよめ

東林原

越公と其地をよめ其地をよめ其地をよめ

例を戦陣の最世に耳馴れたる者に取らん、河中  
島の役にすぐるはなかるべし、先づ彼我の地位  
を知り、而て後此戦争の意味合を思へ、  
史家多くは云ふ、越公は甲公を怨仇あるにあら  
ず、唯村上高梨輩の爲めに地を還さしめんと欲  
するのみと、アア誤まれり、大に誤まれり、是  
れ時宜の一辭柄たりしならん、甲陽軍鑑は連に  
此言を繰返せり、然れども戦争はかかる薄弱な  
る利害否とよ、口實の爲めに本氣に決行せらる  
べきにあらず、(甲鑑は古書と雖疎漫の言多し、  
殊に永祿以前の甲越戦争に關して然り) 這般地  
理上の觀察を爲せ、  
信州の地たるや大山連峰縦横に蔓延し、地勢紛  
糾して、甲越間に介在す、大別して之を云へ  
ば、諏訪(伊那をも籠めて云ふ)小縣(佐久をも  
籠めて云ふ)深志(松本平)善光寺の四區たるべ  
く、其諏訪小縣の地は甲州に比隣し、深志善光  
寺は越州に比隣す、其昔信州衆の強きや、嘗て  
武田家を苦めんが爲めには、諏訪に出て瀬澤菲  
崎に出て、佐久に出て海尻平澤に出て、直に甲

州の頭上に向ひて打撃を試みたり、而も形勢一  
變して信州衆の敗るゝや、土崩瓦解、屈伏する  
ものは武田の麾下と爲り、逃走する者は越後に  
生を儉む、甲州勢は此に於てか深志より小縣よ  
り四出して善光寺平に入り、河中島に占據し地  
の高きに座して越後を伺ふ、形勢此の如しいか  
で一戦のなかるべき、  
予輩の觀る所によれば、越公は村上高梨輩のた  
めにも戦ひしには相違なし、然れども是は全き  
意味にはあらず、河中島を争ふは越公の自衛自  
存の上に於て必至の數なり、(信州衆と長尾家と  
の關係は、別に深き縁由あることも、此に取除  
き) 越公の地位としては、河中島が他人に占有  
せらるゝあらば、春日山頭一夕も高枕安眠する  
能はざる也、  
河中島の與奪は早く甲公の捷利と爲り、一段落  
を爲したるやの様子なきにあらず、果然、越後  
より坂東に往來する大路は全く甲公に中斷せら  
れ、越公の不利危険や甚し、而も越公が此艱危  
の中に在りて、猶路を求めて三國嶺の難路をた

どり、迂回して利根川の源頭より奔下し連に新局面を開かんとしたるは、偶越公用兵の奇變不測を見る、彼の越中加州に入る亦同じ、一虛一實、一進一退、或攻或守、或屈或伸、苦心快心、之くとして皆佳、近人往々甲越二公の性格論を爲すものあり、而も二公の大地位大本據を知らず、捉影追風して千萬言を費すも、文藝には力あらん、史學に何かあらん、河中公が甲公の手に歸するや、越公は全力を擧げて之を抜かんとす、而も牢乎として抜けざりしは、是又分解剖釋せば頗興味多からん、甲越二公の心血を竭盡して此地に奮闘連戦し、多數の將卒を失ひ、歲月久きに渉るも、猶相對峙したるは事實なり、休戦停戦の状態にありしこともあらんが、綜合して之を云へば、天正十年武田勝頼の滅亡に至るまで、甲越の對敵は三十年、依然河中公を離れざる也、

武田勝頼之を聞くや急に河中公より軍を提て關山を越え、直に春日山下に迫りて陣を排布す、越國の存亡實に旦夕を測られざりき、かゝる形勢の一朝にして生したるは、不幸敵國に時機を投與したるに由るや論なきも、亦河中公てふ向背の地が、敵に先占せられしに由るや大なり、之と同時に北條氏は四萬の大軍を以て來攻したるも、三國嶺の阻む所と爲り、其機を逸したるに非ずや、但物の勢も究まれば變ず、景勝は自屈して耻を忍び、勝頼に向ひ城下の盟を爲し、辛くも武田北條の兩旗の連合を殺きたり、越公たるもの何ぞ甲公に怨仇なしと謂ふを得んや、故に曰く越公の河中公を争ふは小怨私仇の故に非ず、自國自家存立の上に大害公憤のあるれば也と、(落後生)

天正六年、越公謙信暴に卒し、二子三郎(北條氏よりの養子)喜平治(族姪景勝)相争ひ、越府春日山の状態見るに忍びざる程の亂を生ず、

○もあの人州のちや海神あてまらんかゝる船の  
 此のあまのなはる角の魚をひめて食ひしめく  
 ちん云あま氏のあ行を載せざるを折る福を獲  
 ちん云うううにえる節のちめまの多氣利宮と  
 越前一福を淡みそひめ氏つまのちあ島の御  
 つゆまをひめをひめつちてちあ島御  
 の謝代りしん

多氣利酒宮

文學士 白田一郎  
 今を距ること二千五百六十二年の昔は遠  
 かなり瑞穂なす豊葦原の中洲も尚ほ天津日  
 の照影暗く醜の夷等跋扈される態の痛はし  
 ければ皇祖の尊茲に東征の念を發し給ひ宮

騎宮を立出させ宇佐穴穂の瀬戸へを經給ひて船艦相含み指さす處は安藝の國の南海岸、山三面を圍みて秀でたる水一方に描わて鹿はしき平時には居を定むるに心地よく事あるの日は要害に據りて膺懲の典を正すに足る  
 尊深く此の形勝の地を愛でさせ給ひ行宮を奠めて七年が程在はしきとは古史に記され

たる所疑はんやうもなし但し此の宮居の名をば日本書記には埃宮としるし古事記には多氣利酒宮としるせる差ひはあれど是は山水の秀麗なるを形容しては可愛の宮と云ひ皇威の赫奕たるを頌贊しては武理の宮と云ひしものにて要は文武の兩道より觀察し來れる差異に過ぎず名を別にして實を一にすること明らけし

斯くまで由縁正しき宮居のことなれば國史を諸んする人士は申すに及ばず教育の道開らけたる今日此頃となりては幼童等に至るまで此の次第承知せぬはなき程なれど兎角は三千年に垂んとせる古事にしあれば宮居の跡の在處定かならずとて所々に争ふ者も出で來りつ幕府の代には彼是の紛議さへも惹き起したることありしが明らけく治る御代の七年と云ふに朝廷より尊き御沙汰あり安藝郡府村なる字誰曾廻森こそ其跡なれとて皇祖の尊を此地に勸請なし社號をば多來家神社とぞ定め給ひしかば浪華の草のよしあしぐさ各が勝手の論ひも罷なく止みて

國史上の偉績長へに後昆に傳唱さるることなりぬ  
斯かる靈地に生を棄けたる己れ等が幸福は事々しく説き立つるにや及ぶべき借ら當時の形勢如何にと想像るに仁保の島宮居の前西に峙ちて波風の荒むを防ぐのみかは盾となり壁となりて敵の寄せ來るを妨ぐるの便りあり暹年日清の戰役譚にて人皆の熟知れる如く威海衛の堡壘在る所を誰曾廻森に見立てんには劉公島は恰かも仁保島の如けんかし人事桑滄の變遷を經來りて今は府中村と仁保郡との間たるへ悉く埋地の新開地も充たさるるに至り當時要害の形勢想像の餘地を殘すに過ぎざれども其の昔しより大空高く聳れたる吳婆嶺ヶ岳は今も尚ほ廣島城なる五師團を照らし源泉清き可愛の川は絶えず吳港に注ぎて鎮守府の礎を護れること實に由縁の深き次第には非ずや去れば二十七八年の事あるに際し大縣を廣島城に駐めさせたるも一方ならぬ理由ありと知るべし

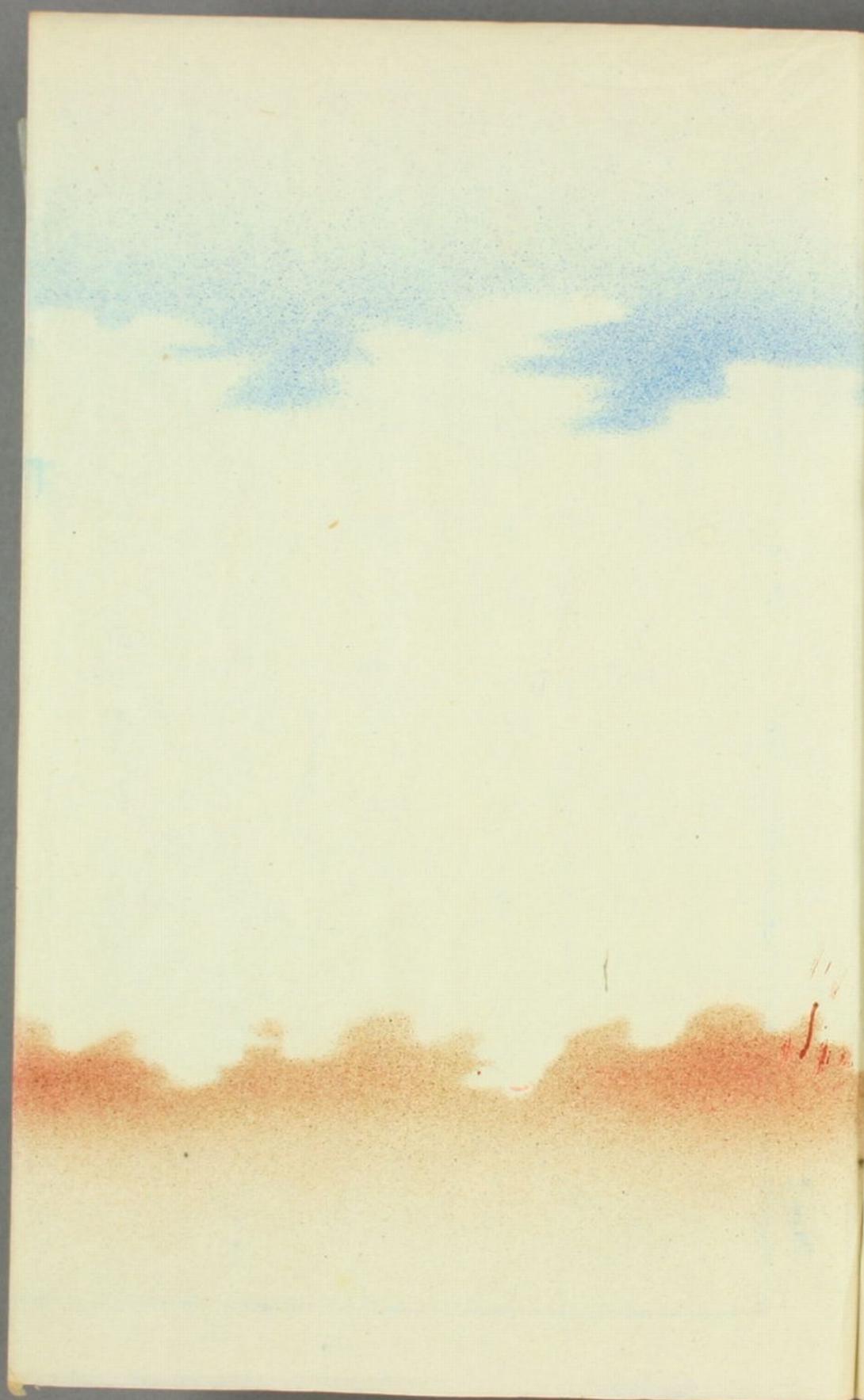
東洋原野

己れ物心附く頃迄は父母の膝下に在り朝夕な靈地の由來説き聞かせくること有りきに其が紀念を未長く一身に纏ひ侍らんと思へるものから從來文書く筆のすさびにも雄々しき節には霜岳の號を用ひ風雅の折には愛川の稱を附すること蓋し斯かる古事より案じ出せるなり霜岳の論も愛川の記も江湖の喝采を得るの價値なれども己れが筆に瀟みては一字一句も我が國体の重きに鑑み我が故郷の生緒に因みては皇祖の尊の恩賜に報ひ奉らんと注意せざるはなし去れば再昨成の秋家に在るの時を機として村人を集へ詢りて府中俱樂部てふ團體を造り其の事務所を多家神社内に置きて漸次に遺蹟發揚に資する所あらんとせり馳せ行く月日に關守なく早くも三年を打過ぎつ言佐閉具天下の事に關はりて四方の旅路に寸暇もなく心ならずも故郷に負くこと争でか憾みに堪へらるべき

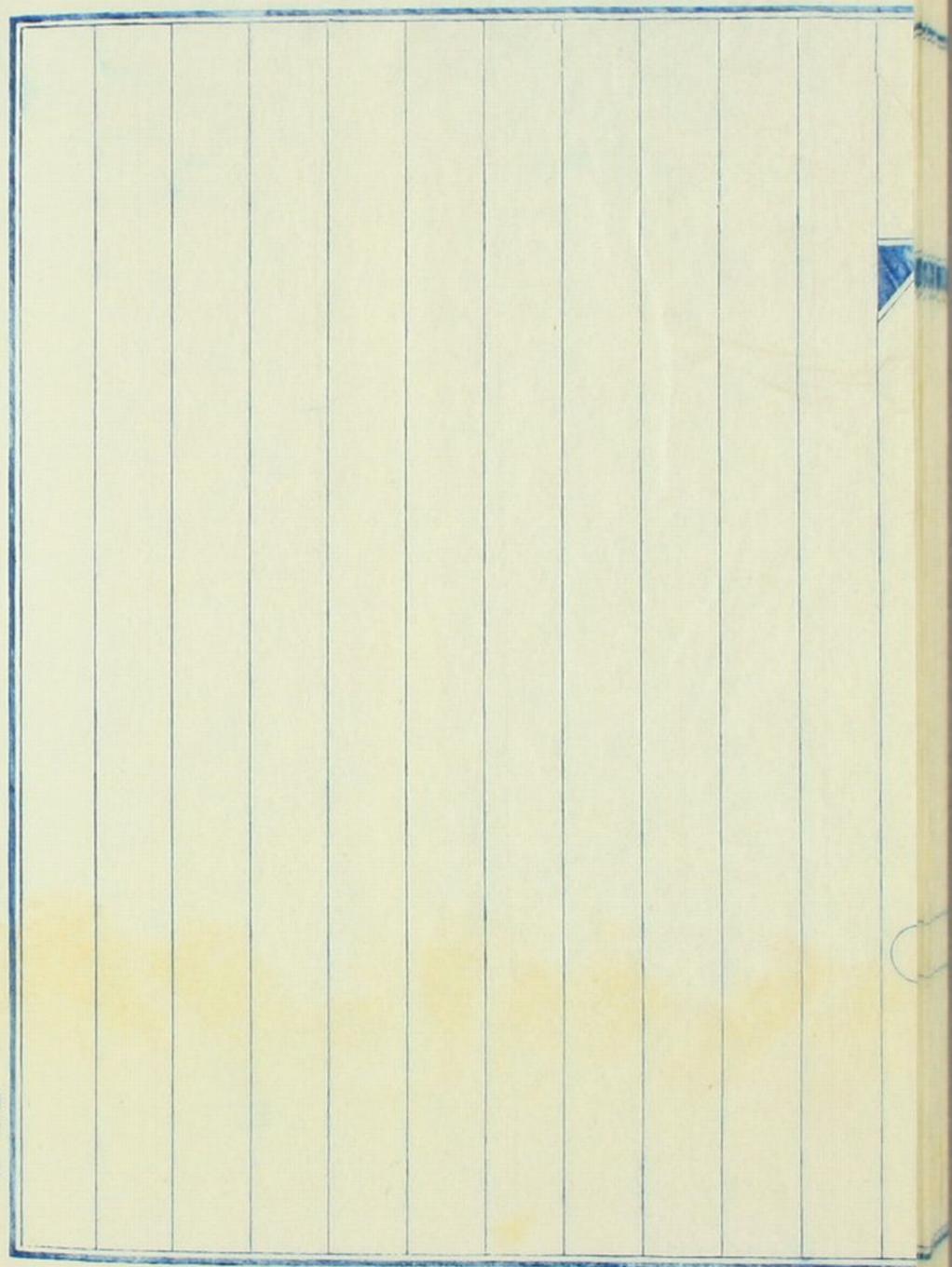
期征戰の策源地たり大和國畝傍宮は第三期肇國の垂統地たり畝傍宮は朝廷よりして齋き祭り給へる典式も久しくして且つ整へり宮崎宮も一昨々年盛んなる祭典を擧げ多氣の宮も近來社格を進められ祭典亦た大に盛を極むるに至れり  
夫れ事の成るは成るの日に成るに非す必らず由りて來る所ありと古人も申されたる如くなれば今日しも第二千五百六十有二回の芽出度紀元節を祝ひ奉るに附けても皇祖の尊が其初め風に櫛り雨に沐して撥亂反正の大業を開き給へる其の策源地の古事を忽せにして可なるべきや已れ此の一篇の論辯豈に桑梓の舊を懐ふのみならんや

一期創始の基業地たり安藝國多氣宮は第二

謹みて考ふるに日向國宮崎宮は神武天皇第



東  
林  
原  
景



明治三十二年

二月十四日起筆

才女梅閑人